

福島県 中学校長会 広報

・就任あいさつ	1
・第63回福島県中学校長会総会	2
・平成25年度 組織及び役員一覧	2
・学校教育の今日的課題	3
・平成25年度県中学校長会の活動と運営	4~5
・第64回全日本中学校長会総会	6
・支会情報と特色ある経営 (伊達・郡山・東西しらかわ・北会津) ...	7~10
・随想	12



就任あいさつ

福島県中学校長会長 君島 勇吉

はじめに、本年3月末をもちましてご勇退された校長先生方のご功績と長年にわたるご指導に対しまして、心より感謝申し上げます。また、大震災、原発事故に伴う各学校における危機管理と復旧・復興に向けた学校運営に対して、示唆に富むご助言等をいただきました本会役員の皆様方に対しまして、心より感謝と御礼を申し上げます。

震災から2年が経過した今年度にもありまして、休校が3校、避難先での仮設校舎等で開校している学校が10校と、震災・原発事故からの復興は大変厳しいものがあります。

県内の各学校では、放射線の問題と向き合いながらも、学校経営・運営ビジョン等に基づき、全教職員が一丸となって教育課程の実施に努めておりますことを大変心強く感じております。

さて、私こと、平成25年4月25日の第63回総会におきまして、福島県中学校長会の会長職を拝命いたしました。微力ではありますが、これまでの本会の歴史と伝統を踏まえ、本会役員、会員各位さらには事務局員の皆さんのお力をお借りして、鋭意努めて参りますのでよろしくお願い致します。特に、風評被害等に挫けない強靱な精神力を備え、本県に生まれ育ったことに自信と誇りを持ち、将来への夢と志をしっかりと持てる若者を育成することに努めたいと考えますので、会員の皆様のご協力をよろしくお願い致します。

課題は山積していますが、平成25年度の県中学校長会の運営に当たり「ふくしまの復興は教育から」を原点に据え、次の4つの観点を踏まえ、その職責を果たす覚悟です。

1 校長会は校長の研修の場として、見識・資質等を高めることを目的としながら、研修の結果等を教育行政に具体的に働きかけます(提言等)。

・各専門部会、各支会の定例会等を通して、具体的な調査結果や行政資料等に基づき研修の充実を図り、学校経営の責任者としての見識・

資質等を高めます。

・震災前からの教育課題と、震災・原発事故後に発生した課題について、分析的に捉え、その解決に向けて、県教委、地教委等と連携しながら、会員の英知と創意を結集して、「福島ならではの教育」の実践・展開に努めます。

2 改訂版「全日中教育ビジョン」の理念と10の提言を踏まえて、学校からの教育改革に努めます。

・「確かな学力」の定着のために、生徒が主体的に学ぶ授業の創造に学校全体での組織的な取り組みを推進します。

・道徳教育の充実、キャリア教育の推進等により、豊かな人間性と社会性の育成に、校長会あげて取り組みます。

3 教職員としての誇りと使命感を持ち不祥事絶無に努めます。

・教職に対する使命感や専門性、生徒に対する情熱を持ち、熱心に教育活動に当たる魅力ある教職員の育成に努め、県民の信託に応えます。

・不祥事に対する危機管理意識を醸成するとともに、ストレスを抱え込まない職場環境作りを組織的、計画的に推進できるように努めます。

4 開かれた学校作りに向け、情報や課題を共有し、連携に努めます。

・保護者・地域社会への情報提供に努め、役割と責任を相互に確認し合いながら連携の強化を図ります。

・小学校・高等学校・特別支援学校等との連携を学習指導、生徒指導、進路指導等において、積極的に推進します。

以上の4点を柱に、全日中、東北地区中と連携しながら、本会各専門部の積極的な取り組みを通して諸課題の解決に向け邁進する覚悟であります。

会員の皆様のご理解ご協力を重ねてお願い申し上げます。

平成25年度 第63回福島県中学校長会総会

平成25年度第63回福島県中学校長会総会は、4月25日(木)、福島県教育会館を会場に開催されました。



総会では、菊池芳次会長代行のあいさつの後議事に入り、平成24年度会務・事業の承認及び決算報告が上程どおり承認され、続く平成25年度の役員選出では、満場一致で君島勇吉氏(福島第四中学校)が会長に選出されました。新会長からは、「免外教員数の減少」「東北大会、全国大会への勤務態様、旅費の改善」「震災復興担当教員の配置の長期化」「SCやSSWの増員、適切な配置」等の課題について、「全日中教育ビジョン」をもとにしながら、平成25年度の各中学校と福島県中学校長会の充実・発展を図っていきたいとのあいさつがありました。

その後、平成25年度事業計画及び予算案が、今年度の重点事項を中心に審議され、原案どおり承認されました。また、本会活動の推進にあたっては、「学校は復興のシンボルであり、復興の活力源」であるという認識を新たにし、校長のリーダーシップのもと、会員の英知と創意を結集し、さらに「全日中教育ビジョン」を踏まえながら、校長会の組織的な取り組みを通して、教育課題解決に努めていくという方針が確認されました。

総会の後に行われた小・中合同開会式では、小・中校長会を代表して、中学校長会会長君島勇吉氏があいさつし、続いて、来賓を代表して、県教育委員会教育長杉昭重氏、市町村教育委員会連絡協議会会長芳賀裕氏、元県中学校長会会長車田喜宏氏より祝辞をいただきました。最後に、前県小学校長会会長丹野学氏が退会役員を代表してあいさつされ、式を閉じました。

平成25年度 組織及び役員一覧

※ 理事が2名いる支会(福島・郡山・いわき)の支会長；◎印
※ 常任理事；○印

役職名	氏名	勤務校	
会長	君島 勇吉	福島 四	
副会長	行財政	山寺 精吉	福島 二
	研究	菊池 芳次	若松 一
	進路指導	吉田 隆見	富岡 一
	生徒指導	根本 保男	船 引
監事		伊藤 幸夫	行 健
		佐藤 一彦	北塩原一
		井上 恭一	原 町 一
理 事	福 島	◎山寺 精吉	福 島 二
	福 島	君島 勇吉	福 島 四
	伊 達	蓬田 吉穂	釀 芳
	安 達	○佐藤 英之	二本松二
	郡 山	◎市川 正道	郡 山 二
	郡 山	佐藤 秀治	郡 山 三
	岩 瀬	渡部 修一	須賀川一
	石 川	佐藤 俊久	泉
	田 村	根本 保男	船 引
	東西しらかわ	○箭内 清和	白河中央
	北 会 津	菊池 芳次	若松 一
	耶 麻	渡部 登代子	喜多方三
	両 沼	齋藤 芳信	本 郷
	南 会 津	○渡部 岩男	田 島
	相 馬	大原 正義	中 村 一
	双 葉	吉田 隆見	富岡 一
い わ き	◎○佐藤 治郎	平 三	
い わ き	飯塚 啓文	植 田	

【事務局】

事 務 局	事務局 長	菅野 善昌	福 島 一
	行財政部 会長	小山 金也	福 島 三
	研究部 会長	佐藤 和彦	渡 利
	進路指導部 会長	栃久保 富雄	大 鳥
	生徒指導部 会長	吉田 務	岳 陽
	広報部 会長	高橋 賢司	吾 妻
	庶 務	茅原 秀雄	北 信
	会 計	香内 一宏	信 夫

学校教育の今日的課題

学校経営を考える 学校経営充実のために… ～着実に“伝わり”“響く”かかわり～

福島県中学校長会副会長 根本 保男
(田村市立船引中学校)

インターネット環境の整備が進み、「教育福島」から「うつくしま教育通信」へと変わりましたが、先頃、「教育福島」の前身であった「教育月報」や「月報」を目にする機会がありました。かなり古いもので、ちょうど私自身が小学生、中学生の頃に発行されたものもありました。その中に、学力向上に関する特集があり、効果のあった取り組みとして次のようなことが示されていました。

大きな成果を上げた学校は、毎日の授業に本気になって取り組み、その上、課題を与えて家庭学習を奨励し、翌日丹念にその課題を見てやるといった努力を反復して一步一步積み上げていった学校であったこと。あるいは、能力別指導を徹底して、遅進生徒の学力を向上させることに日頃から努力した学校であったこと。学習指導と生徒指導は切り離せず、きちんとした態度の気力の充実した学校や学級では、一般的に学力もついている例が多かったこと。テスト問題については、担当の教師自身が診断的な問題を作成して、常に児童生徒のつまづきを発見しつつ指導を進めるべきであること。また、毎日の授業と結びついた教師自作のテストでは、客観テストのみでなく、論文体テストなどを活用し、思考力や判断力を高めるべきであること。ほぼ半世紀も前の教育論議ですし、もちろん、実態や程度にも差は感じましたが、私自身が今課題として捉え、改善・解決に向け努力している状況に思いをめぐらせながら特集を読み終えました。学力向上もそうですが、私たちが今、校長として適切にリーダーシップを発揮し解決しなければならない学校経営上の課題はたくさんあります。半世紀前の先輩方が課題解決に向け課題に真摯に向き合い、具体的によりよい手立てを構築し、着実に実践に結びつけようとする姿勢は、私たちにとっても変わらぬものであります。課題解決に向け確かな実践を積み重ねるためには、当た

り前のことですが、私は、課題や手立ての確かな意識化、そして、日々の教育活動に対する丁寧なかかわりと指導の継続が必要であると思っています。私は、本年度の学校経営のキーワードの一つに、「着実に“伝わり”“響く”かかわり」を挙げました。せっかくよい手立てが示されたとしても、その手立てが十分に実践に生かされない場面も見受けられます。その手立ての必要性や有効性を着実に理解させることが課題解決のための確かな実践の土台となります。日々のコミュニケーションを生かす、相手としっかり向き合い理解し提示の仕方を工夫するなど、校長から職員に、教師から子どもたちに、学校から保護者や地域に、それぞれの立場から思いや意図を確かに伝え、手立てをより効果的に実践することで一つ一つの教育諸活動の効果を高め、子どもたちや職員の力を高めていきたいと思っています。

話題は変わりますが、本年度は、昨年8月に立ち上げたホームページの充実にも力を入れています。スマートフォンの急激な普及に伴い、中学生の所持率も増加し、生徒指導上の問題も大変危惧されていますが、一方では、ホームページをパソコンではなくスマートフォンで手軽に閲覧できる時代になりました。管理者であれば校外のパソコンやスマートフォンから自由に記事を投稿することができる時代になりました。ホームページに対する関心が高め閲覧数を増やすことは、学校の教育活動を理解していただく手段となるばかりでなく、大きな災害が発生したときの情報共有の貴重な窓口となることを期待できると考えています。

最後に、私の好きな言葉に「啐啄の機」という言葉があります。大切な機会を逃すことなく、「かかわり」を大切に教職員一人一人を育てることができるよう、これからも日々学校経営の充実に努めたいと考えています。

平成25年度 「県中学校長会の活動と運営」

事務局長 菅野 善昌

東日本大震災及び原子力発電所事故の発生から2年数ヶ月が経過し、避難先から徐々に子ども達が戻りつつあるなど、復興に向けた明るい兆しが少しずつ感じられるようになりました。しかし、今なお、約7千人の小・中学生が他県等に避難を続けています。また、中学校においては、本年4月現在、原子力発電所事故の影響により、臨時休業している学校が3校、仮設校舎等での授業を余儀なくされている学校が10校に上る現状には心が痛みます。

また、学校の建物を含めた敷地内の除染はほぼ完了していますが、除染廃棄物の処分の問題も極めて深刻であることから、通学路等の除染については未着手の状況にあり、放射線の問題と向き合う期間は、今後も長期化するものと予想されます。それだけに、県内の各支会及び各学校の状況に応じた放射線・防災教育の推進など、教育復興には依然として険しく、厳しい道のりが続きます。このような中、各校長は学校運営の要となり、「安全・安心」を最優先としながら自校の教育活動の正常化に向けた取組みを展開するとともに、関係各機関との密接な連携のもとに新学習指導要領を踏まえた教育課程の適正な実施に努めていかなければなりません。さらに、「学校は復興のシンボルであり、復興の活力源」であるということを肝に銘じ、各校長のみならずすべての教職員が、認識を新たにして中学校教育の充実を図っていくことが私たちの使命であります。

本会の運営につきましては、震災後丸一年が経過した昨年度から可能な範囲での従来の活動を再開するという基本方針を踏まえ、昨年10月17日には、県中学校長会研究協議会会津大会を開催し、震災、原発事故の影響や避難者受け入れなどに対する様々な対応や課題等について協議題とし、本

県の震災発生時、そして原発事故発生後の各学校における対応と危機管理について理解を深めました。

平成24年3月には、「ふくしまを生きる～福島県中学校長会からの報告～」と題して、本県の早期復興を願い報告書を発行しました。本年度はその第2集として「凜と生きる～震災体験が切り拓いていく教育～(仮称)」の編集を進め、第1集発行後、学校が向き合った課題とその取り組みを振り返るとともに、福島の未来を担う生徒の育成に向けた各学校の取り組みを共有し、今後の本県の中学校教育の復興の方向性を検証したいと考えています。また、この報告書の発行を通して震災・原発事故の教訓を風化させることなく、本県教育の充実のために後世に伝えたいと考えております。

また、本年度は、全日本中学校長会の研究主題「未来を切り拓く豊かな人間性と創造性を備え、社会において自立的に生きる日本人を育てる中学校教育」を受け、8つの小主題について各支会ごとに分担し、各支会及び各学校の実情に応じて研究を推進し、その成果を研究集録としてまとめ、校長としての資質の向上と学校経営の改善に生かしていきたいと考えております。

平成26年度には、6月26日(木)・27日(金)の両日にわたり東北地区中学校長会研究協議会福島大会を福島市飯坂町を会場として開催する予定で、本年5月にこれまでの準備委員会から実行委員会に組織替えをし、県北地区の会員を中心としてその準備に取り掛かっているところです。

今年度も、各支会との連携の強化を図るとともに、県小学校長会や高等学校長協会、その他関係諸機関との連携に努めながら諸課題の解決を目指していきたいと考えております。

会員の皆様の深いご理解とご協力、そして積極的な取り組みをよろしくお願いいたします。

専門部会活動の概要

● 広報部会 ●

広報部会は、広報誌「福島県中学校長会広報」を年2回発行するとともに、昨年度から開設したホームページの維持・管理を行い、本会及び関係団体等の活動状況や会員に役立つ新しい情報などを提供し、広報活動の充実に努めます。

1 本会及び関係団体等の活動や動向についての情報を提供し、広報活動の充実に努めます。

(1) 本会の組織・運営、事業内容、活動状況の報告

- (2) 各支会の活動及び、本会活動への会員の意見や感想の紹介
- (3) 関係団体等の活動概要の報告
- (4) 広報紙の発行、ホームページの運営、資料の整理

2 関係機関・団体等との連携を深め、情報を提供します。

- (1) 関係機関からの情報把握と会員への早期周知
- (2) 要望活動の報告 (広報部会長 高橋賢司)

● 行財政部会 ●

東日本大震災から2年数ヶ月が経過した。県外から戻る生徒が増えてきたことや、教員採用数が増加する見通しであること等、明るい材料が出てきました。一方、依然再開できない学校や再開場所が他の場所である学校が多数あること、通学に1時間以上も要する生徒が数多くいること等、未だ異常な状況は、まだまだ残されています。

そこで、本部会では調査・・・に加え、特別調査を継続実施したところです。

1 当面する課題の調査研究活動

各校が抱えている課題をはじめ学校教育の現状を把握することにより、学校が自ら解決に向けて取り組むべきものと行政機関が果たすべき責務を明らかにし、要望内容を吟味します。

2 要望活動等

各調査結果を分析・考察し、明らかになった課題の解決や本県義務教育の充実・振興に向けた提案を構築し、要望活動等に臨みます。

(行財政部会長 小山 金也)

● 進路指導部会 ●

1 「生きる力」をはぐくむ進路指導の推進

- (1) 進路指導体制の改善・充実
 - ・キャリア教育の充実をめざす進路指導
 - ・啓発的体験学習を取り入れた進路指導など
- (2) 適正な進路指導推進のための資料収集、整備活用の工夫
 - ・情報の収集、整備、活用と進路相談
 - ・各支会の進路指導主事会の活動と充実など

2 高等学校入学者選抜方法の改善に向けた高等学校との連携や関係機関への要望活動

- (1) 高等学校との連携強化
 - ・高等学校長協会、私立高校協議会との話し合い活動の推進(特に、調査書記載内容の統一に向けた話し合い活動の継続)など
- (2) 高等学校入学者選抜方法の改善、要望活動の推進
 - ・県立高校入学者選抜事務調整会議への要望や意見等の資料作成
 - ・入学者選抜方法、内容、震災後の状況を踏まえた課題の把握と改善のための資料収集と提供など

3 適正な進路指導充実のための諸調査の実施と資料提供

- (1) 進路指導に関する諸問題の把握と資料提供
 - ・平成24年度末進路指導に関する調査の分析と連携のための資料提供
 - ・平成25年度末進路指導に関する調査
 - (2) 学級活動の時間の充実のための副読本編集
 - ・「中学生活と進路(県版)」の編集と活用
 - (3) 適正な就職指導、専修学校・各種学校等の選択指導のための指導助言活動の推進
 - ・就職情報の収集と関係機関との連携強化
 - ・専修学校、各種学校等の資料収集と提供
- (進路指導部会長 栃久保 富雄)

● 研究部会 ●

1 共通理解に基づく共同研究の推進

研究の2年次あたり、「研究の手引き」に基づいた8小主題による共同研究を推進します。

2 研究集録の編集

今年度は、研究主題に基づく第2年次までの研究成果を研究集録として編集します。

3 全日中、東北地区中と連携した研究の深化

(1) 6月27日、28日の東北地区中宮城大会では第3分科会(健康・安全教育)で石川支会が研究成果を報告しました。

(2) 10月24日、25日の全日中福井大会に参加し、他県の研究推進にかかわる情報等を収集し、各支会へ提供します。

(3) 平成26年度東北地区中福島大会の開催に向けて、県北3支会(福島・伊達・安達)と連携しながら準備を進めます。

4 報告書「ふくしまを生きる」第2集の編集

(1) 研究部会が中心となり、各専門部会の協力を得ながら特別委員会を設置して編集を進めます。

(2) 発行のコンセプトは、「震災体験が切り拓いていく教育」で、以下の内容を考えています。

福島の中

福島県中学校長会としての取り組み

被災校の現状

学校が向き合った課題とその取り組み

『凜と生きる』福島の子ら

私たちの責務

教育復興に向けて、中学校長会が果たすべき責務と進むべき方向性に検証する中で、未来を拓く福島の子らの姿がより伝わる内容にしていきたいと考えます。発行は、平成26年度中を予定しています。(研究部会長 佐藤 和彦)

● 生徒指導部会 ●

東日本大震災後にかかわる中・長期的な課題を把握し、それらに的確に対応するとともに、生徒が社会生活を営む上において、欠かすことのできない規範意識の更なる向上を目指します。

1 高い規範意識と望ましい人間関係を基盤とした学習集団づくりに努力します。

生徒指導の機能を生かした教育活動の充実と学習・生活習慣づくりの推進

2 不登校やいじめ、反社会的問題行動、震災にかかわる生徒指導上の課題等、当面する課題解決に組織をあげて対応します。

問題行動等の実態把握、教育相談の充実と規範意識の育成、学校生活適応指導の強化

3 小学校及び高等学校・家庭・地域・関係機関・団体との連携を強化します。

事故防止、問題解決に向けての共通認識・行動連携の更なる推進

4 生徒指導関係刊行物を編集、刊行します。

「生徒手帳」の編集、刊行

(生徒指導部会長 吉田 務)

第64回 全日本中学校長会総会

5月22日23日に、平成25年度全日本中学校長会総会が東京・代々木の国立オリンピック記念青少年総合センターで開催され、総会と講演、文部科学省行政説明が行われました。

総会では、まず、三町章会長のあいさつと退会役員への表彰状贈呈、来賓祝辞がありました。退会役員への表彰では、根本眞前会長が功労者として表彰されました。

続いて議事に入り、平成24年度会務報告・決算が承認された後、新役員として、会長に細谷美明氏（港区立御成門中学校）が承認されました。会長就任のあいさつでは、これまでの経験を生かし、次の3点について取り組んでいきたいという抱負を述べられました。

「全日中教育ビジョン～学校からの教育改革」改訂版を踏まえた、すぐれた学校経営に関する各学校の実践情報の提供と、同ビジョンで明らかになった教育条件整備に関する国への働きかけ

東日本大震災に被災し、今なお困難な生活を強いられている、被災地の生徒や、その指導に当たっている学校への支援

新政権のもと設置された教育再生実行会議、並びにそれに連動する中央教育審議会の、提言等に対する積極的な関わり

その後、平成25年度活動方針・予算が承認され、平成26年度第65回全日中研究協議会の開催地として北海道苫小牧市が提案され、承認されました。最後に「全日本中学校長会は、教育改革の推進と当面する諸課題の解決に努め、新たな中学校教育の創造を目指し、国民の信託に応える」等の宣言・決議を承認して総会を閉じました。

2日目には、講演がありました。

講演 「当面する初等中等教育上の諸課題」

文部科学省初等中等教育局長 布村幸彦先生

はじめに、政府に設けられている教育再生実行会議と、自民党に設けられている教育再生実行本部と2つの組織が同時並行で動いているので、見極めていく必要があると話されました。

教育再生実行会議では、いじめの問題がとりあげられ、その中で、道徳教育の重要性、法律の制定、責任ある体制、毅然とした適切な指導、体罰禁止の徹底等について話し合われたと説明がありました。また、教育委員会の制度のあり方がとりあげられ、権限と責任の明確化、国、都道府県、市町村の役割の明確化、地域住民の意向の適切な反映について話し合われたとのことでした。現在、小学校英語活動について話し合いがなされており、今後、大学と高校の接続、大学入試のあり方、6・3・3・4制の弾力化等が話題にあがるだろうとのことでした。

その後、学習指導要領の改訂のポイントとして、「言語活動の充実」「理数教育の充実」「道徳教育の充実」「外国語教育の充実」についてお話があり、「キャリア教育」「全国学力・学習状況調査の実施」「教職員定数改善」「生徒指導」「特別支援教育」等についても言及されました。



支会情報と特色ある経営

伊達

伊達支会の活動



伊達支会長 蓬田 吉穂
(桑折町立醸芳中学校)

伊達支会は、伊達市の6校と国見町・桑折町の各1校、計8校の会員で組織される「伊達地区中学校長会」として活動しています。中学校独自の活動もありますが、普段は1市2町の26校の小学校長で組織される「伊達地区小学校長会」と一緒になった「伊達地区小中学校長協議会」として活動しています。震災復興2年目を迎え、「郷土伊達に生まれ、伊達を愛し、伊達で生き、伊達の未来を拓く児童・生徒の育成」を一つのスローガンとして「元気な学校・信頼される学校」づくりに会員心一つにして励んでいるところです。

- 1 「伊達地区小中学校長協議会」としての活動
基本テーマの「教育改革期における学校組織マネジメントの確立と推進」を受け、具現化の視点
ア (新) 学習指導要領の趣旨と内容を踏まえた学校教育・経営の推進<特に授業改善を図る>
イ 体育・健康指導(放射線対応を含む)の充実をめざした学校教育・経営の推進<防災教育・放射線教育の地域カリキュラムの開発>
ウ 危機管理意識の高揚と危機回避・処理能力の向上にかかる組織づくり<危機管理についての講演会・研修会の実施>
エ 情報の共有化と有効活用の推進<各校の学校運営・経営ビジョンの交換と協議会の実施>などに焦点を当て取り組んでいます。
- 2 「中学校長会」としての活動
定例会を中心として、各種報告、案件や課題の協議、研修、中教研や中体連等の各種団体との情報交換を密に行い、学校経営や生徒指導の協働態勢をとっています。
- 3 「教頭会」との連携
管理職を目指している教員を対象に「教職員研修講座」を開設し、地区の校長・教頭が講師となり進めています。また、地区の全教員対象に学級づくり等の「教育講演会」を開催しています。

《学校紹介》

「変化し続ける学校経営」

伊達市立伊達中学校

本校では、自ら求めて学ぶ生徒の育成を目指し平成8年度の新校舎建築を機に、「教科教室方式」による授業を実践してきました。現在までの17年間、学力向上については一定程度の成果を収めてきましたが、ここ数年、生徒相互及び生徒と教師の望ましい人間関係を形成するという点で、様々な課題が見られるようになりました。特に東日本大震災後の生徒達の心の変化は大きく、いじめ等生徒指導上見過ごすことができない問題なども発生しました。そこで昨年度、より良い学校生活を送らせるために生徒、保護者と話し合いを重ね、市教育委員会の指導も得て、今年度当初から、学級編制がある1学年と2学年は、期間を限って所属学級の教室で授業を受けるという旧来の方式に変更しました。現在、1・2年生ともに人間関係の問題も発生することなく落ち着いた学校生活を送っています。

また、週1回「生徒活動日・部活動なしの日」とし、生徒会が中心となり放課後、ボランティア活動や生徒会諸活動等に取り組める日を設定しました。活動例を紹介しますと、生徒達が自ら地域の老人ホームや保育園等の施設と交渉し、介護や支援活動のお手伝いをしています。授業と部活動以外のところで生徒達が本気になって、しかも笑顔で取り組む貴重な教育活動となっています。

これまでの学校経営を振り返ると、生徒の実態に即してとは言いながら、ややもすると教師主導のプランが先行するきらいがありました。社会や生徒達は刻々と変化しています。学校もその変化に即して変わらなくてはなりません。変化することに不安はありますが、勇気を持って変化し続ける学校経営に取り組んでいきたいと思えます。



(校長 佐藤 敏意)

郡山

郡山支会の活動



郡山支会長 市川 正道
(郡山市立郡山第二中学校)

郡山支会は、市内28校の会員と私立1校の計29校で組織され、和やかな雰囲気の中で活発な議論を展開し、活気溢れる運営がなされています。今年度は、9名の新任・転任の会員を迎えて、新たな組織でスタートを切りました。

東日本大震災・東京電力原発事故発生から2年4ヶ月が経過しようとしております。各学校においては、震災前の教育活動が展開されつつありますが、まだ完全とは言えません。校長会の中で、課題への対応については情報交換を密にしながら、子ども達が「思う存分に持てる力が発揮できる」教育環境づくりに邁進していきたいと考えております。これからも、チームとして心をひとつにし、会員の英知を結集して諸問題の解決に取り組んでいきたいと思っております。

今年度の主な活動を紹介します。

1 定例校長会について

定例会は年6回、6部会の活動報告や研究活動、放射線への対応や生徒指導を中心とした情報交換等、きめ細かく行い共通理解を図りながら進めています。

2 市教委との連携について

震災直後より随時もたれ、現在も継続的に市教委と校長会役員との連絡会議が開催されています。より最新の情報が的確に把握できるとともに、諸課題の解決に向け共通理解が図られています。

3 中高特の連携について

年2回、中高特連絡協議会を開催し、進路指導や生徒指導、放射線の対応等について、それぞれの取り組みの意見交換を行っています。また、連携をより深めるため、懇親会を実施しています。

《学校紹介》

「小中、小小連携による教育の推進」

郡山市立西田中学校

本校は、昭和36年に高野中学校と逢隈中学校の統合中学校として創立し、平成3年新校舎に移転しました。一昨年には創立50周年記念式典を開催しました。学区は、5地区の小規模校5校から生徒が入学してきます。現在は、1年42名、2年30名、3年46名の合計118名の生徒が本校で学んでいます。5つの小学校の児童が本校に入学することから、小学校から中学校へのつながりを円滑にし、小学校と中学校や小学校間の具体的な連携を図り、西田町の子どもたちの連続した9年間の学校教育を推進しています。

具体的な連携としては、町内6校(中学校1、小学校5)の教職員が「西田町の子ども教育を考える」という理念のもと西田町教育協議会が組織されており、目指す子ども像を共有しながら、小中連携・小小連携による教育を推進しています。

主な事業を紹介いたします。

- 西田町教育協議会総会及び情報交換
- ・町内6校の全教職員が参加
- ・定期に開催の西田町小中学校校長会
- ・年4回を開催または臨時に開催
- 小中学校相互授業参観
- ・各学校の公開授業を相互に参観
- 西田町教育協議会教科指導研修会
- ・授業公開及び研究協議会
- 中学校教師による出前授業
- ・各小学校への出前授業
- 西田チャレンジ
- ・町内小学校6年の児童が中学校に集合してのレクリエーション
- 『西田町のこどもの「生きる力」を伸ばすために』を小中学校の全保護者へ配付



(校長 宗形 俊二)

東西 しらかわ

東西しらかわ支会の発足

東西しらかわ支会長 箭内 清和
(白河市立白河中央中学校)



本支会は、4月の県中学校長会総会の会則の改正により、正式に発足しました。今までの西白河支会(14校)と東白川支会(4校)が統合し、東西しらかわ(18校)

となりました。

- (1) 県南地区(西白河支会、東白川支会)の各校長は、地区や県の中学校長会の役職に加えて、中教研並びに中体連の役職を兼ねていたため、学校を留守にすることが多く、学校経営上望ましくない状況が発生していた。

特に、この状況は東白川支会に顕著に見られ、当該校長の負担加重になっていた。

- (2) 近年の広域人事により、管外から新任校長が多く配置され、2、3年後に出身地に戻るため、長期的展望に立った地区校長会の組織運営が難しくなっていた。

昨年度、以上の課題を解決するために両支会の校長会を一本化し、組織力の強化を図るという「統合」の方向性を確認しました。西白河の金子英昭支会長(白河二中)、東白川の古川晃支会長(棚倉中)の精力的な働きにより、各支会の関係諸団体(小学校長会、教育委員会、退職校長会等)の理解を得て、県中学校長会理事会の承認に至ることができました。両支会長のご尽力に深く感謝申し上げます。

なお、中体連についても校長会同様の名称で、今年度から統合され、中教研についても近い将来「統合」の方向で検討中です。

東西しらかわ支会は今春、3名の新会員と4名の転入会員を迎え、今までの会員と心をつなげて、新たな校長会のスタートを切りました。

今後、校長会を運営していく中で、様々な問題が出てくると思いますが、研修会等を通して会員同士でよく話し合い、校長会の活性化を図りながら、校長一人一人の力量の向上に努めていきたいと思っています。

《学校紹介》

「9年間を見通した小中連携の推進」

西郷村立川谷中学校

本校は、戦後の昭和20年に川谷地区に入植した先人達が、「開拓は、教育に始まり教育に終わる」との-high理想を掲げ、昭和21年に旧陸軍兵舎の一部を教室として一人の教師と三人の児童・生徒から出発しました。その後、分校時代を経て川谷小学校と川谷中学校となり現在に至ります。

川谷小学校とは校舎が一体化しており、少人数である特長を生かして、小中学校9年間での連携した教育活動が様々な形で行われています。

そのいくつかを紹介したいと思います。

- (1) 小中合同行事の実施

入学式、授業参観、運動会、避難訓練、マラソン大会、文化祭などを合同で実施する。

- (2) 川谷小学校との共同研修の推進

「9年間の『学び』の連続性を考慮した、きめ細やかな学習指導はどうあればよいか」をテーマに小中連携実践研究を推進する。

- (3) 小中教員相互の授業交流の実施

小・中学校の教員がチームティーチング等により授業交流を行い、連携を深める。

- (4) 小中合同の生徒指導協議会の開催

小・中学校の教職員が互いに児童生徒の情報を交換して課題を共有し、共通理解のもとに協力して児童生徒を支援する。

- (5) 小中一緒のPTA活動

「川谷小・中PTA」として、PTA総会、専門委員会、各種PTA行事を一緒に行い、小・中学校の保護者が連携・交流を図る。

このように小・中学校9年間を見通した様々な小中連携の取り組みを通して、地域と一体となった川谷地区ならではの教育活動を展開しています。

(校長 佐藤 博)



〔小中合同運動会でよさこい踊りを披露する中学生〕

北会津

北会津支会の活動



北会津支会長 菊池 芳次
(会津若松市立第一中学校)

北会津支会は、会津若松市、磐梯町、猪苗代町の3市町15名の会員で組織されています。昨年度は7名、今年度は2名の異動がありました。

ました。

昨年度は、情報交換の場の設定 会津域内 幼小中高代表者会議アピールの活用 県、東北、全国研究大会の成功を中心に置き、横の連携を密にし、協力し合いながら活動してきました。特に、10月に磐梯青少年交流の家において開催された県研究大会においては、北会津支会を中心に会津全体が協力してあたり、参加していただいた多くの校長先生方に好意的な言葉をいただきました。

北会津支会の今年度の取り組みとしては、

1 研究協議会、研修会の開催

年3回の研究協議会においては、各専門部会、教育関係団体からの報告を行い、その活動について協議していきます。また、横のつながりを重視するため、情報交換の場を大切にしています。研修会は3市町を年次で開催し、県研究部北会津支会割当の第7小主題に沿っての協議を行い、その後地元教育長様の講話、懇親会を行っています。今年度は8月に猪苗代町で開催します。

2 退職校長会北会津支部との懇談会の開催

毎年11月に合同の懇談会を開催しています。昨年度は現職(中学校)が当番となり、双葉南小学校長の末永幸弘先生を講師に招き、「震災を振り返って」のテーマで講演していただきました。退職校長先生方にも大変好評でした。今年度は退職校長会が当番となります。

3 県中教研会津大会の開催

10月に県中教研会津大会が開催され、北会津支会では4教科(技家、美術、保体、社会)を担当します。実行委員会組織も立ち上がり、各市町村教委の協力のもと、各教科ごとに準備しています。数少ない我々のための研究会ですので、内容のある充実した研究会にしたいと考えています。

《学校紹介》

「伝統を継承し、憧れと誇りを胸に！」

会津若松市立第六中学校

昭和53年に永和中と神指中が統合し開校、創立35周年を迎える生徒数132名の学校です。学区には、愛の甲冑で有名は直江兼継が手掛けた神指城址があり、幕末、山本八重とともに戊申の役で戦った娘子隊長中野竹子殉節碑や阿弥陀寺(御三階)には、新撰組三番隊長齋藤一が祭られ、会津の歴史と文化の薫りを残す土地柄です。

さて、本校は、毎朝、生徒会長が太鼓を鳴らし始業を告げます。「憧れと誇りをもち、三つの伝統を継承・発展させ、正々堂々と生きる六中生」のスローガンの下、「三つの伝統」を紹介します。一つめは「黙想」です。チャイムと同時に着席し、委員長号令により始業前に腰骨を立て姿勢を正し心を静め学習に臨み集中力を高めます。二つめは「無言清掃」です。清掃時に心を込めて自分たちが使用した箇所を隅々まで丁寧に拭き・磨きます。着任した教師は異口同音に清掃態度を絶賛します。三つめは「体力づくり」です。保健体育や部活動での体力づくりは勿論ですが、6月の衣替時に、全生徒は「半袖・短パン・ぞうり履き」の薄着励行を行っています。伝統を重んじる生徒たちは、学習・運動に真剣に取組み、伸び伸びと清々しい姿で目標に向かって努力できます。

また、生徒会が「大志っこ宣言」を策定し、それらをバイブルとし、末尾には『当たり前のことを当たり前にする！』と謳っています。

現代社会や教育に必要な条件の一つは「当たり前のことを当たり前にする(できる)」ことではないでしょうか。山本(新島)八重の筆額書「美德以為飾」は、内面の美しさ・毅然とした態度など、最後まで清く・正しく・美しい生き方を「当たり前」に教えてくれています。

(校長 高畑 健一郎)



新会員紹介

支会	氏名	校名
福島	大和田 一成	立子山
伊達	家久来 三典	月館
安達	大竹 宏之	小浜
郡山	小山 健幸	湖南
郡山	下重 典子	二瀬
郡山	石綿 厚	宮城
郡山	福地 淳一	御館
岩瀬	吉田 ひとみ	湯本
石川	石井 直人	須釜
西白河	長沼 政美	五箇

支会	氏名	校名
西白河	志村 充代	大信
西白河	板橋 竜男	中島
北会津	諏佐 一夫	東(猪苗代)
両沼	高橋 弘悦	西山
南会津	石本 浩一	檜枝岐
南会津	藤田 信一	只見
双葉	堀本 晋一郎	浪江東
双葉	星 秀美	津島
双葉	波立 真一	葛尾
いわき	小林 敏史	内郷三

新会員の声

「心に火を灯す」

伊達市立月館中学校長 家久来 三典

「三十二名の入学を許可します。」四月六日、月館中学校長としての第一歩を歩み始めました。服務宣誓式、第一回職員会議、地域の挨拶回り、目まぐるしく毎日を過ごし、生徒との出会いにほっとした瞬間でもありました。

赴任前、前任地の校長先生や諸先輩方から温かい励ましの言葉や、校長としての心構えをご指導いただきました。その言葉から、学校経営の理想・理念を自分に再度問いかけ直し、現任校での課題を見極め、教職員をどう動かすか、目指す生徒像はどんな姿か、模索し始めました。

第一回職員会議で、教職員に次のような話をしました。島崎藤村の言葉に「人の世に三智あり。」という言葉があります。「学んで得た智。」「人と交わって得た智。」「自らの体験によって得た智。」、そのような三智を身につけた生徒を育てていきたいので、皆さんは自分の持ち味を十分生かしながら力を結集して、目指す生徒像を築いていきましょう。この言葉は、学校だよりのタイトルとし、学習・行事等を通しての生徒の成長を保護者にお知らせしています。

初めての伊達市の勤務で、地区のこと、地域のこと十分わかっていないことが多くあります。そのような中で、「わからないことがあったら遠慮なく、いつでも聞いて。」と温かい言葉をかけていただいたり、「困ったことがあったら、いつでも相談してください。」と、校長会の諸先輩からの勇気づけられる言葉をいただき、心が奮い立たされます。

「教職員の心に火を灯し続けてください。」所長訪問の際、言われた言葉でした。その時は、すぐに気がつかなかったのですが、校長昇任考査の志願理由に書いた言葉でした。改めて、初心を忘れずに、子どもたちのために、教職員の心に情熱と意欲を灯し続ける学校経営に、微力ですが、真摯に取り組み続けたいと思います。

「校長になって～未来を創る～」

いわき市立内郷第三中学校長 小林 敏史

新聞に次のような記事が載っていました。

ワールドカップ出場を決めた侍ジャパン。その代表選手の多くが「欧州組」で、メンバーの8人はドイツのクラブで活躍していた。今季の欧州チャンピオンズリーグ決勝では、史上初めてドイツのクラブ同士の対決となり話題になった。そのドイツも、2000年の欧州選手権では1勝もできず「ドイツの権威は地に落ちた」とまで言われた。この状況を打破するためにドイツサッカー連盟は真剣な取り組みを開始。それは一言で言うと「未来の勝利を創る」ことだった。独自の育成プログラムによる徹底した指導で子どもたちを育成。この取り組みによって優れた若手選手が次々と育ち、10年の歳月を経てドイツサッカーの復権を成し遂げたといわれる。(一部抜粋)

この記事を読んだとき、私たちの日々の取り組みも、かくあるべきだと思いました。すばらしい社会、すばらしい未来を創造できる力を持った子ども、その未来を託すに足る子どもたちを育てていく。ここに私たち教育者の使命と責任と誇りがあるのだと思います。この一点を忘れずに校長職に邁進してまいります。

裏磐梯檜原湖の入り江にある小さな集落雄子沢おしざわが初めての任地でした。当時は檜原湖一周道路が未完成で、早稲沢、桧原村から行くと行き止まりの村でした。3年間勤務し、2年目からは雄子沢分校六畳一間の宿直室で自炊しました。そこは、除雪をしない地区だったので、晩秋から降り積もる雪で車は使えず、「陸の孤島」とも呼ばれていました。集落からひと山離れた分校で子どもたちの登校を待っていました。

1月になると、厚く氷の張った湖の上を歩いて本校裏磐梯小学校へ行きました。月一回の職員会議が給料日に行われたのです。給料手渡しの時代でした。氷の張らない11月と12月は、雄国沼から檜原湖に注ぐ雄子沢川を渡り「京ヶ森」を越えて行く山道しかありません。膝をゆうに超す雪の深さに片道2時間はかかりました。誰も歩かない京ヶ森のてっぺんから檜原湖を見下ろすと、そこは水墨画の世界。美しかった。ただ墨が滲んで雪に溶け出しているようにも見えたのでした。

5月。かつて幼いわが子を連れて泳いだ相馬の原釜海水浴場に立つ。海水浴で賑わった砂浜は波が高く、時計の針が止まったまま崩れかけた監視台だけ踏みこたえて残っていました。漁に行けずに縛られた船が、港を埋め尽くしています。荒れたままの土地にわずかに残った松の木。海に向かって掌を合わせました。紺碧の空にさえずる雲雀の鳴き声だけが耳に残りました。

平成23年3月12日(土)午後3時36分。

東京電力福島第一原子力発電所1号機(大熊町)原子炉建屋が爆発して白煙が上がる。経済産業省原子力安全保安院は、「現時点で炉心溶融が進行しているとは考えていない」枝野幸男官房長官は、「建屋の壁の崩壊で、中の格納容器が爆発したものではないと確認した」と記者会見で話しました。「政府、東京電力などが総力を挙げて万全の対応に努めている。落ち着いて対応してほしい」

15日(火)は福島市の放射能測定値23.88μシーベルト/h。「直ちに健康に影響を与える数値ではありません」「落ち着いて対応してほしい」枝野氏の口から何度も出てきた言葉でした。対応に疲

れているが真剣な眼差しで記者会見に臨む枝野氏の言葉に、安心したいという思いがもたげてきたのは否定できません。考えるのはもうやめにしたいという気持ちにも似ていたのでした。

五木寛之氏は「人間の覚悟」(新潮新書)の中で、次のように書いています。

「敗戦の夏、私は12歳で平壤(ピョンヤン)の街にいました。その時唯一の頼りだったラジオ放送は、治安は維持されるから市民は軽拳妄動を慎んで市内にとどまれ、と繰り返し放送していました。高級軍人や高級官僚たちとその家族は、家財道具を山のように積み出して、平壤の駅から列車で南下していったのです。一般市民は、動くなと言われておとなしくしていたところ、やがてソ連軍が入ってきて、家は接收され、みな難民収容所のような所へ押し込められ、交通は途絶して列車も動かなくなりました。

どれだけ国を愛していても、政治のシステムが民衆を最優先にするとは考えられないのです。」

原釜の海で掌を合わせながら、五木氏のこの言葉が、涙が滲むほど胸に届いたのでした。

政府が繰り返した「落ち着いて対応してほしい」という言葉が、「治安は維持されるから、市内にとどまれ、動くな」と重なり、避難命令を出しはしても、如何に楽観的で根拠のない言葉であったか。「直ちに健康に影響を与える数値ではない」という言葉は、科学的に根拠のないことを「直ちに」という言葉でオブラートに包む言語学的操作であって、いかようにも解釈できる政治の世界の巧妙な言葉なのです。それは、そうあってほしいと願う判断であり、事実判断とは区別されるべきで、不覚にも私が枝野氏の言葉に安心していいのかと感じたのは、厳しい事実判断を自ら避けようとしたからではなかったのか。

「いつか、必ずよくなる」私たちの望みとこの現実を伝えていかねばならない。

<参考文献>

岩波書店「いま考えなければならないこと」

岩波新書「有事法制批判」

福島民報社「東日本大震災 特別編」

随想



福島支会長
山寺 精吉
(福島市立福島第二中学校長)

言語学的操作に気づく時